慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 幸福な慰め、寛容なリスペクターたち、そして思想の幼児退行。：<br>リュック・フェリー著『成功した人生とは何か』について |
| Sub Title | Une philosophie des masturbateurs (Comment lire "la vie réussie" chez Luc Ferry?) |
| Author | 関, 幸太郎(Seki, Kotaro) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 2005 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.89, (2005. 12) ,p.74(243)- 89(228) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 立仙順朗教授退任記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00890001-0089 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 幸福な慰め、寛容なリスペクターたち、そして思想の幼児退行。

## ーリュック・フェリー著『成功した人生とは何か』についてー

関　幸太郎

「それを、死なせてあげようよ。」by Feist [1]

「追い抜こうとしてもそこは間違った車線」by Stereo MCS [2]

「じいさんたちはいつも自殺をはかった若者を探しだしては家へ連れてきて、生き返らせては、どうして死ぬ気になったかそのわけを聴きだした、たしかそうでしたね？で、最後は結局……二人で助けた連中を絞め殺してしまった」by レム [3]

## Intro

俺は自分で自分のことをほめてあげる。よくがんばったね、俺。お疲れさん。うん、俺は俺なりに、よくやったと思うよ。素晴らしかった。だけど、いくつかうまく行かないことがあったね。さて、俺は自分で自分を慰めよう。どうやって？　キミはいったいこういうとき、どうするんだい？そう、いくつか不快なこともあったな。とても不快なことがね。あまりにムカツイタから、気持ちがどうしても整理できず、まだ興奮が残っているよ。さて、俺は自分で俺の乱れた心を鎮めよう。しかしどうやって？　そしてこの悪い興奮は、どんなふうに鎮まって行くのかな…。あ、それとさ、キミにきいておきたかったんだけど、俺は最終的に、成功したのかな、それとも失敗したのかな。これは俺が自分で決めてもよいこと？　もし成功

したんだったら、俺は自分で自分に御褒美をあげなきゃね。ところで、えっと、いったい何を「自分への御褒美」として準備したのだったっけ？俺は俺に何をあげたら喜んだのかなぁ…。故意に幼児じみた口調で問題を提起してみた。だがしかし、おそらく問題はもはや、「正統的な哲学の問題が果たして存在するか」というかつての問いではなく[4]、どこまで思想が退行することが可能か、いつの時代までどのようなかたちで生き残るのか、という問いなのだ。「『そのとおり』ボドキンは実験台のあいだをブラブラ向こうへ歩いていった。『過去三年間に、ロバート、きみとわしとは、動物界のうち約五千種類ものを調べ、文字通り何万という新しい植物の変種を見てきた。どこでも同じパターンが繰り拡げられ、無数の変異が組織体を完全に変形させて、そうした物が新しい環境に適応して生き伸びられるようにした。どこでも過去へ向かって進む同じ雪崩が見られた——その勢いがあまりに強いので、斜面の上に足がかりを持って変化しないままなんとか持ちこたえている二、三の複雑な組織体が、はっきり異例のものと見えるくらいだ——それはほんの少数の両棲類と、鳥類と、それから人間だ。』」[5] 果たして真に我々は時代の退行から逃れているのだろうか？　それとも思考が幼児化することすら、これは環境への適応なのであろうか？周知のとおりリュック・フェリーは現代のフランスを代表する哲学者のひとり、また一時期ラファラン政権のもとで文部教育大臣を務めた人物だ。身近で倫理的な問題を思想史を外観しながら口当たり良く語る最近の傾向をアンドレ・コント-スポンヴィルなどとつるみながら形成している。今回我々が敢えてここで彼の比較的最近の作品である *Qu'est-ce qu'une vie réussie ?*[6] が提起する問題について頭をひねるべきいくつかの動機は以下の信念に根ざすものである。すなわち、この作品の解読を通して倫理思想にはもはや思考は無用となっているという仮定と実感を少しでも確かなものとすることができる。考えることを許されない思想を生きることである。

## - ONE - 望まれる幸福の貧困さ

すべての望みがかなうとしたら…貧乏な孤児の若者が就職試験を受けに行く電車の中で空想する自分の将来：自分が会社に採用されたなら、やがてそこでの自分の仕事が高い評価を受け、そして上司の娘と結婚、重要なポストに就き、人生に成功！フロイトがファンタスムに共通する傾向を説明するために紹介したこのエピソードをフェリーは彼の著作の冒頭で引用している (LF p.8)。誰もが欲しがる成功、幸福な人生。人々がその願望のために対立し、孤立する。そしてその秘められたストーリーに横たわる核心。ありきたりなストーリー。子供の夢。子供じみた夢？　ターゲットを広く設定し、万人受けするように作られたハリウッド映画のストーリーのようだ。アシモフ原作の映画『アンドリュー』。ロボットが進化することによって最終的に彼が欲しがるものは、愛し合うための機能。しかしこの愚かな夢を非芸術としてあざ笑うほどの繊細な地下（アンダーグラウンド）平がこの世に残っていると言えるのかな(7)；まさに定形表現の最終境地としてのそれ。成功のイメージの貧困さについては一考の価値があるかもしれない。ありきたりなものを大事なものとして心の奥底にしまう我々の悔恨、野心、はかない期待。ショー・ウィンドウに並ぶ無数の商品達の中のたったひとつのもの。しかし私が欲しがっているものはおそらく他人も欲しがっている。なぜなら我々は同種族なのだから。今すぐ買わなければ。数日後に店に戻ると既にそれが姿を消しているという体験。私は、自分がみなとそっくり同じ欲望を持っているということを恥ずかしく思う。しかし私はそれを認めます。フェリーは言っている：

> 「自分の性的な妄想の秘密を知られるくらいなら、自分がしでかした最も許され難い罪を認める方がマシだ。しかし、その妄想というのは、普遍的とまで言わずとも、最も共有されているものである。それらはぞっとするほど平凡なものなのだ。」(LF p.9)

なんともギベール的なセリフ。ここからフェリーが抽出するプログラムは所有の夢、妄想による修復、誘惑の理想。われわれはいつも現在の貧困を嘆き、それとは知らず自ら修復を加えた過去を憧憬のまなざしで懐かしむ。そしてそこから将来を展望する。「良き生活」という展望、「成功した人生」という白昼夢。ノスタルジー＋リハビリ＝幼児退行。ん？　ノスタルジー－幼児退行＝リハビリかな？それとも…？　わかんなくなっちゃった。それにしても地の地に落ちた（terre-à-terre !）哲学？赤面混じりの口調でフェリーは「成功した人生」という哲学的テーマの現代性をこう説得しようとする：

> 「成功した人生とは何か？（…）おそらくこの問題はあまりに善良に過ぎて、少なくとも笑いを誘うし、しかもその答えがあまりに個人的で、あまりに私的であるゆえ、それを研究しようとするひとの勇気を殺ぐかもしれない。」しかし「本当のことを言えば、この個人的な感情というのは、哲学的選択の問題であるばかりでなく、長い歴史の産物なのだ。」(LF pp.53, 55)

フェリーが長い間こだわってきたシェーマをここで重ね合わせれば、我々が取り組む論考の問いの輪郭を改めて明確に示すことができる。問題のひとつとはすなわち：宇宙論的、宗教的、あるいはユートピア的な原理を失った今、我々がなおもとりつかれている「成功した人生」とは何か、ということだ。フェリーによれば、我々は常に超越的な何かの中に自らを正確に位置付けることを「成功」と考えてきた。プラトンやアリストテレス、更にストア学派にとっての「成功した人生」：我々ひとりひとりを超越した外的な優れた現実の秩序に自らを位置付けることに結果を得ること。成功した人生の意味を作るのは自分ではない。それを謙虚に宇宙の秩序の中に発見する (LF p.56)。宗教的な原理では個人の上に神を仰ぎ、ユートピア的な原理では個人の上に人間性を、といった具合にである。いずれもこれらのシステムは、共同体の中への個人の位置付けというプログラム

を目標としている。ならば現在我々が依拠している超越性の正体は何なのか、あるいは自ら得た位置に不満があれば、それを何に訴えるべきなのか、という問題が実に単純に提起される。我々はいかなる名のもとに幸せであろうとするのか。

## - TWO - 人間性の上流ではなく、下流へ！ イラッシャイマセコンバンワー

マニュアルという牢獄に暮らすことにはもう慣れた。味見は許されるが味を変えることは許されない。ご注文を繰り返させていただきます！　そして単純だと言われる二者択一の後に上下双方から厳しい評価を受ける。うんざりするほど知っていることだ。しかし次からが問題。つまり一方で奇妙なことに、囚人同士ばかりでなく囚人と監視員とがお互いに非常に尊敬し合いしかも誉めあっている。どういうことだ、これは新しい。街中で出くわしたら目線を慌ててそらしたくなるコワイお兄ちゃんが歌うラップの歌詞が、気恥ずかしいしかも根拠のないヒーリング感たっぷりの歌詞、反抗のかけらも無く無際限のリスペクト。こうなれば、もしかして言えてしまうことがある。倫理的な問題はすべて解決されてしまっている。なんだかんだいって、みんないいひとなんだよ。フェリーの問いはもう少し謙虚でシビアだ：もし倫理が完全に守られる社会が実現したら？　という空想。彼によれば、倫理がトータルで人間の問題を取り除くことはあり得ないという。フェリーは強く出て、いかなる問題も倫理の完成によっては解けないと主張するが、例として、老化や、教育、宗教的な派閥の対立を挙げている (LF p.p.44-45)。で、より恐ろしい問題の核心は以下：

> 「すべての倫理を、どのくらい無しで済ませることが望ましく、また可能であるかという問題。」(LF. p.96)

よく聞こえてくる話：会社で上に立つ人たちの主たる仕事は「無駄を減らす」こと、コストを減らせば表彰！　これと同じ調子でやれって？　そ

ういえば多かれ少なかれ、「もともと倫理や道徳は応報主義（retributivism）にもとづいている。（…）しかしながら、地球環境の問題を考えるとき、われわれはこのような応報主義の原理を従来の形式のままでは採用することのできないような種々の局面に遭遇する」[8] といった言い草や、あるいはスラヴォイ・ジジェクも、ラカンとカントが道徳を打算的な神との取引までに拡げることを間違っていると考えていた、と言いながら、一方でその弟子のアレンカ・ジュパンチッチはカントを援用しながら「そもそも道徳とは不可能なことを要求するもの」であることを強調する[9]。フェリーは「いかに生きるか？」という問いを哲学固有の存在論として問い直す作業の重要性から出発し、その第一課題として「救済」をテーマにした宗教観・宗教史の見直しを掲げる。そしてやはり彼もまた、絶対性（un absolut）つまり「『交渉不可能』なものとして我々に立ち現れるものの資格」(LF p.37) を想定しない救済はありえないとしている。そこで次なる課題がこれだ：

> 「いかにして、再び宗教的な問題提起に陥ることなく絶対的な何かを迎え入れることができるであろうか？　それがまさに問題になるのである。」(LF p.37)

もし倫理における交換性の不完全さによって残余する「絶対的なもの」に多くの価値を見出そうとするのであれば、地上的な打算の中にも同等の「絶対的なもの」を認める作業が少なくとも必要だ。撞着語法になるが「打算のイデア」なるものを想定して人間の不完全な打算と対置し、前者を崇めることも不自然なことではなかろうし、実際注目すべき可能性ですらある。こうした視点がフェリーのそれである：

> 「それは『世界の絶望』でもなく偶像の脱構築でもなく、逆にそれらの再歓喜なのである。その新しさは、人間性の上流ではなく下流に位置付けられた、超越性の新たな形態の出現なのである。それらは急進

的な他所に突出したものではもはやなく、人間性に根を下ろしたものなのだ。自然にも神性にも基礎を置かず、人間性に根を下ろしながら、真実や善意や美そして愛がそれらの「神聖な」性質を失っていないのは実に奇妙なことではありながら。」(LF p.73-74)

人間性の下流にいったい何があるというのだろう？

## - THREE - 夢の共演、各々の理由なき反抗

荒野にエンジン音が響く。4台の車がスタートの合図を待っている。ルールは使い古されたチキン・ゲームのそれ。誰が一番の臆病者か？　誰が勇者か？　数百メートル先は崖になっている。いっせいに車をスタートさせ、崖に向かって自慢の愛車を猛スピードで走らせる。崖から一番ギリギリまでガマンできた者が勝者だ。もちろん、ブレーキを踏み間違え崖から転落すればそこに待つのは死のみ。さて、レーサーを紹介しよう。一号車、古代の知恵ストア学派代表エピクテトス！　二号車は謙虚さ＋隣人愛＝啓示の宗教代表アウグスティヌス！　三号車は科学のファンタジー＆ユートピスト代表ジュール・ヴェルヌ！　四号車は真の自分らしさを追求する強さの哲学代表ニーチェだ！　さあ4台がスタートした、ものすごい砂煙を立て、崖に向かうぞ、死の恐怖を目前にして先にブレーキを踏むのは誰？　先に車から飛び降りてしまうのは誰だろう？　あなたは誰に賭ける？…ところが、これら4台の車は、世界でも有名な向こう見ずのドライバーたちを乗せたまま、なんら躊躇することなく崖の向こうへと消えてしまった。誰も死を恐怖することなく、次から次へと、崖から落ちる彼ら。やはりやつらは半端ではない…唖然とする観客たち。仮にフェリーが成功と不成功をテーマに映画を作ったとしたら、最初のクライマックス・シーンはおよそ以上のような感じになるだろうか。そしてフェリーはあなたに手招きする。まだ一台だけ車が残っている。わかっているよ、あなたにも同じことができるはずだ。しかし、崖から落ちていく前に、あなたが何を思って死んでいくか、是非それを聴かせて欲しい。絶対性と救済の関係の

新たな形態の追求の名のもとにフェリーがいくつか組み立てみせる倫理観のプロトタイプを分析するための装置は至ってシンプル。死の恐怖の克服という御褒美(トロフィー)、秩序と慣習という二種類のガスを使うハイブリッド・エンジン、そして協調か裏切りかを選択できる意思決定ボタン。これらのパーツを使って集団内の個々の成員の協力関係という観点から彼のテクストを分析してみたい。試しに次のはどうだろう、フェリーがキリスト教と比較しながらストア学派の教えについて述べた箇所である：

> 「ストア学派における救済は、キリスト教のそれが個人的な不死を可能にするというものではなく、むしろ仏教のそれのように、有限であることについての感情に結びついたあらゆる不安を払拭することにある。なぜなら賢人が理解するように、存在の偶然性は人間に依存しているのではなく、調和の取れた世界の秩序に依存するのだから。」(LF p.61)

この救済への第一歩は、フェリーが繰り返し強調しているところだが「社会的な慣習の重みを捨てることにある」(LF p.59)。これに従うなら我々が行動する際の意思決定ボタンを押すとき、自分以外の者たちがどのように振舞うかを考慮に入れる必要はない。慣習が邪魔になるわけだから、ありがちな行動は指針にならないわけだ。指針となるのは自然の秩序、理性による秩序の探求こそが有限のはかなさを無限へと位置付ける行為すなわち人生の成功を手に入れる道となる。フェリーはこのストア学派のプロトタイプと現代のエコロジストのそれとの類似性を指摘しているが( LF p.56)、たしかに矛盾は無い。慣習が環境に「やさしい」方向へと働いていれば現在のような環境破壊は導かれなかった。自分以外の人間が好き勝手に振舞った結果こうなっているという信念。つきつめればこのタイプの人生観では、自然科学系の強い探究心が厳しい理性によって支えられている安定感を持っている一方で、実際フェリーがキニク学派やストア学派の賢人たちの奇行をいくつか引いているように( LF p.58)、他人がますますアホ

に見えるという自己中心的な視点に陥る危険性も強い。少なくとも、彼らが初対面の相手に協力関係を求めるようなことは期待できない。反して、キリスト教においてはどうか。ストア派の救済では人間存在の有限性が人間自身には依存していない、心配しても仕方がないと諭すのがせいぜいであったのに対し、キリスト教が約束するのは精神あるいは魂の不死だけではなく個人的に私自身の肉体の不死なのだ。このインパクトの強さは決定的である。そしてここでも実際には、神と私との契約という縦の関係はそれほど重要となっていない。私と他の人との関係が問題なのだ。協力関係が最大限に生かされれば、得られる利益は肉体の不死である。私も信じるからキミも信じてくれ、この協力関係が信仰心として隣人同士を結びつける。最後まで信じたら死後また生き返ることができる。しかし、信じなければならないその報酬は、大嘘レベルの奇跡だ。もし相手が信じるのをやめてしまったら私はバカ話を信じていた愚か者となる。先に私が裏切って信じるのをやめれば少なくとも自分があざ笑われることは無い。ここにジレンマが働く。そこで信頼関係の補強に効果的に働くのが利他的行動としての隣人愛、多くを望まないことによって最終的にはトクをする結果を生む謙虚さの教え、そしてなんといってもキリストの受肉という概念である：

> 「神の子が人となったという問題は、救済の新たな教義の表象に直接結びつくものである。救済の表象がひとのかたちをとったということが、ギリシャ人の考えていたそれよりも、はるかに「コストパフォーマンス」に優れていたことか。そのことを『神の国』の作者は何度も強調している。」(LF p.334)

そもそも彼らのコミュニケーション＆コミュニティーは、ランダムに出会った相手が自分と同じ手で来るという信頼と協力関係で成り立つ。慣習、すなわち他人と同じことをしたがる傾向は、隣人愛で見事に彩られ、謙虚さという規律が完勝逃げ切り型の関係を求めることを抑制する。更にはキ

リストが何度か生き返って見せたことが、同じひとのかたちをした自分も生き返ることが出来るというひとつの大きな自信となったことは言うまでも無い。ただ、そのうち世相が変わってひとつ大きな問題が出てくるとすれば、よみがえり（あるいはその世相に合わせてそこに置き換えられる新たな大嘘ないしは最後の大どんでん返し）をリアリティーをもって信じる相手を見つけること、自分がそんな大それた最終利益を信じ続けることができるかどうかということだ。以上二つのプロトタイプを対照的に描いたが、最後にニーチェのそれはどうだろう。科学的な真実を認めず、主体の存在すら認めない最も過激な唯物論者とフェリーが命名するニーチェ (LF pp.123-127)。かといって彼の力への意志が秩序も慣習も必要としなかったわけではない。彼の意志においては「ある新たな創造、例えば新たな帝国の創造は、友人達よりも敵達を必要としている」(LF p.149)。相手が自分の打つ手と違う手（劣った手）を打ってくると考えるストア派のタイプが一方にあり、相手が全く自分の手と同じ手を打ってくると信じるキリスト教のタイプが他方にあったが、ニーチェは敵と出会うことを望み、彼もまた相手の敵であろうとする。彼の新たな帝国では互いを裏切ることが互いの最大の利益となり、それは永遠に繰り返される：

> 「永劫回帰は、実際のところ、価値基準以外の何ものでもない。それは生きるに値する瞬間瞬間の選別の原理なのである。」(LF p.160)

このニーチェタイプの回帰に反省は含まれていない。ストア派のタイプでも、未知の相手に協力を求めない点においては同様であった。しかしストア派の場合にはあくまで理性の声に従って選択がなされる。あくまで自分で自分を救おうとする選択になるが、相手を裏切り続けることが自分の不利益になる（結果として宇宙の摂理に反する）と判断されれば、繰り返される選択の中で相手に協調する手を打つことも十分に可能性としては考えられるのだ。しかしニーチェの世界では、最初から互いを裏切ることが最大限の利益を引き出すよう設定されている（裏切ることが協調を意味す

るとも言える）ゆえに裏切りの選択が永遠に繰り返される。その点では逆にまた真の信者であろうとすればやはり同じ選択（この場合協調ボタンの方であるが）を繰り返すという点でキリスト教タイプと類似することにもなる。さてフェリーの分析を素材にしながら以上で十分に「倫理的な駆け引き」の三つのパターンを必要最大限に簡略化し効果的に描くことが出来た。そこで気づかれると思うが、以上の意思決定の動機から選択結果に至るまで、実際には「超越的なもの」の入る余地はない。関係性の外部など存在しないのだ。もともと成功不成功と倫理思想の類型化というテーマの設定からしてフェリーのスタイルは唯物論寄りなわけだから敢えて驚くことでもなかろう。我々は倫理的な交渉をするときに、超越的なものと交渉するわけではない。理性は交渉相手ではなく、交渉相手と接する上での指針だ。神を信じるとひとが言う時、ひとは神と交渉しているのではなく、隣人と交渉している。宇宙の摂理にしろ神の摂理にしろ、理性にしろ隣人愛の習慣にしろ、それらは意思決定をする者に内在する情報であり、しかもごく限られた範囲の知識である。それはポパーが言う知識に最も近い。「知識の進化論にむけて」という講義において彼は言う：「大方の種類の知識は、人間の知識か犬の知識かにかかわらず、仮設的なものか、推測的なものです。特にごく普通の種類の知識は、単純に期待の性質をもつものと説明されます（…）動物だけが知ることができるのでしょうか。何故植物にそれができないのでしょう。明らかに、わたしが知識について語っている生物学および進化論に意味いおいて、動物と人間が期待をもち、それゆえに（無意識の）知識をもっているというだけでなく、植物もまた知識をもっています。そして、事実上すべての生物がそうです。木々がより深い地層にその根を押し進めることによって、多量に必要とされる水を見つけるということを、木々は知っています。」(10) もしフェリーが超越性を見いだすのであるとすれば、それは意思決定を行う者とそれを分析する者との視点を混同していることに起因する。それにしても、この混同には一理あるし、あるいは避けられないことなのかもしれない。最終的にフェリーが提示する「現代における超越性」のモデルと方向性もここに絡んでくる

のだ。というのも、それは人間と神を混同することを秩序とするモデルなのだから。

## -FOUR- 意図を持たない遊びから抜け出れない

そもそもフェリーが何故このような問いを中心とした著作を書いたのかという議論も当然我々の責務に含まれよう。フランスの哲学はいつのまにか哲学史についての哲学になってしまった、かつてそんなことを言ったのはフーコーだったか。そして今現状を見るに、哲学はいつのまにか一般教養のマニュアル本になってしまう。これはおそらく堕落ではない。「倫理学の思考システム」の必要性についてデネットが言う：「概して哲学者たちは、リアル・タイムの意思決定という実際的問題など、無視してもよいと考えてきた。私たちは誰も有限で忘れっぽい存在なため急いで判断しなければならないのに」(11)。そして更にもっと強調しても良いと思われる点であるが、基本的に倫理学の理論が進化論的還元論になることはもはや避けられないことなのだ。我々が上で試みた極端な還元は、もちろん倫理的な選択を迫られた時のシチュエーションを合理的に処理するための準備ではない。少し考えればわかることだが、合理性というのは行為主体の意図に従って事前的に働くことによってその合理性の効果を発揮するものだ。それに反して、進化というのは「意図を持たない主体の概念」なのである：「進化とは、ある選択肢（＝行動）を実行した後で、その結果が評価関数に照らして最適でないと判断すれば(次回以降は)別の選択肢をとるという主体の織り成す相互作用メカニズムを指す」(12)。果たしてフェリーのプログラムは、この進化の勢いに逆らうことができるのか。最終的に彼がたどり着くモデルは人間を人間が神格化するというモデル。我々は今その時代を生きている。そしてここでフェリーと進化ゲーム理論的倫理観が完全に合流する。神学論的超越性でもなく、また唯物論的なそれでもない：

「禁域の拒否、あらゆる類いの『絶対知』の拒否によって初めて第三のタイプの超越性が『内在性における超越性』として立ち現れる。こ

の内在する超越性こそが人間 - 神による人間主義の描写と思考に意義を与え得るのである。すなわち、諸価値が自らをさらけ出すのはまさにこの『私において』なのであり、また私の思考、私の感受性においてなのであって、論拠としての権威や、その源流を現実の基盤としての神あるいは自然に持つ他律など、外部の参照項においてではないのだ。」(LF p.452)

いかにしてこんなアクロバットが可能になるのだろう。いかにすればフェリーが言うように「共通善の問題が個々人の利益に優先することをやめる」ことになるのか(LF p.457)。こうした無根拠な倫理観を可能にするには思考と意思決定との距離を限りなく同一視する必要がある。「必要」というよりはそれは喜んで受け入れたい事実であるはずだ。自分が欲しいものは一番自分が良く知っている。欲しい物を欲しい量だけ決めて選ぶだけでよい。ただその決断と責任を負うのは自分だが[13]。そしてもし、私自身の決定があなたのそれと衝突しているようには私にもあなたにも見えないとすれば、それが起こり得る場はひとつである。「複数の要素が有限な資源をめぐって争う力学系」は「進化」の定義となると同時に「倫理」のそれにもなり得る[14]。フェリーはフロイトのリビドーの行先を4つに分類しているが、すなわち、直接的な満足、代用品で満足、退行、病気になる、である(LF p.216)。彼はそこで微笑ましくも「三匹の子豚」のエピソードを語る。目先の楽しみよりも何とやら(LF p.209)。しかしここで見逃せない矛盾が起きる。長期的展望の倫理観は進化のそれに負ける。フェリーが真に自分のモデルを「成功した人生」のモデルにするならば、進化のそれを採らねばなるまい。現在進化によって生き残ってきたタイプは、時代時代のその瞬間ごとに常に勝ち抜いて来た形質であることに間違いない。「とりあえず今は負けておいて」という遠くに目標を見るオプションはあり得ない[15]。よって上の4つから「直接的な満足」と「退行」の二つが選ばれることになる。実は倫理的駆け引きのテーマを哲学の問題の中心に位置付けた時点で「退行」は決定的になっていた。フェリーがドゥルーズを援用し

ながらニヒリスム批判をするときにも、既にその兆候が現れていたのかもしれない：

「最も深い地点で、ニヒリスムは宗教的態度と区別がつかなくなる。生より上位の超越的な価値を作り、それによって生を評価するという意志とともに。」(LF p.92)

生よりも上位に位置付けられたのはニーチェ的な「芸術家の思考、肯定的で創造的なそれ」である。フェリーはこれを人間性に内在化したモデルとして最終的に提示する。もはや思考と倫理ゲームとは区別できないのだ。ロールシャッハ・テストの研究において定義されるコントロールされた「適応的退行」とは、遊びを遊びであると自覚して楽しむことである[16]。進化にも倫理にも遊びをそれとして自覚できる主体は存在しない。意図や目的はもちろん、コントロールも存在しない。囚人のジレンマを進化ゲームとしたアクセルロッド有名な実験がある。ただ協調を繰り返すプレーヤーから、ただ裏切りを繰り返すプレーヤーまで、様々な作戦を組み立てて戦わせた。想像に難くないが、裏切りを繰り返すプレーヤーたちはすぐに協調派を食い尽くして食糧危機の状態に陥る。最も生き残りに成功したのは相手の手をただひたすら繰り返す「おうむがえし」のプレーヤーだった[17]。人間性礼賛を超越的に内在化させるフェリーのモデルは、自分自身のコピーを相手にうまくやっていけるタイプが生き残るだろうと言ったドーキンスの物言いに妙にしっくり合う[18]。

## Outro　三つの復讐モデル　結論に代えて

若い職人が盗難事件で濡れ衣を着せられ投獄された。獄内で彼は、刑期が過ぎて出獄した暁に、自分に濡れ衣を着せた犯人を殺害することを誓う。しかしその復讐が済めば、彼はまた投獄され、死刑になるだろう。この職人をどう救ったらよいのか。(三池崇史監督映画『SABU』参照)

心臓移植手術を受け、奇跡的に命を救われた男。彼は、自分が授かった

心臓が、ひき逃げされて事故死したある男の心臓だと知る。彼は、そのひき逃げされた男の妻のために、ひき逃げ犯人を殺害しようとする。心臓移植を受けた男は、犯人を見逃そうとする。被害者の妻が代わりに犯人を殺そうとするのを目の当たりにして、心臓移植を受けた男は、授かった心臓をピストルで撃ちぬく。生き地獄。(アレハンドロ・ゴンザレス・イナヤリトゥ監督映画『２１グラム』参照)

ある裕福で社会的な地位の高い男が、娘を誘拐される。その娘は、誘拐犯の意志とは無関係に事故死してしまう。裕福な男は、誘拐犯の共犯者の女を見つけ出し殺害するが、共犯者の同志に復讐を受ける。裕福な男は、自分の胸に刺されたナイフを見ながら、自分に復讐したのが誰で、また何故自分が復讐されたのか、見当のつかないまま死んでいく。その顔は、愚かな子供のようだ(笑)。(パク・チャヌク監督映画『復讐者に憐れみを』参照)

註

(1) ファイスト『レット・イット・ダイ』2004 Polydor。

(2) ステレオ MCS『パラダイス』Beat Records, 2005, 対訳：浅沼優子。

(3) スタニスワフ・レム『捜査』深見弾訳　ハヤカワ文庫 SF306　早川書房 1978, p.52 (SLEDZTWO by Stanislaw Lem, Copyright 1959 by Stanislaw Lem)。

(4) Cf. Dominique Lecourt, *L'ordre et les jeux*, Grasset&Fasquelle, Paris, 1981.

(5) J.G.バラード『沈んだ世界』東京創元社　峰岸久訳　1968 ( The drowned world by J.G.Ballard Copyright 1962 in U.S.A. by J.G.Ballard ) p.60。

(6) Luc Ferry, *Qu'est-ce qu'une vie réussie ?* Éditions Grasset & Fasquelle, 2002. なお、以下では本書からの引用と参照は略号 LF とページ数によって示すことを許されたい。

(7) クリス・コロンバス監督『アンドリュー』エディション DVD　ソニー・ピクチャーズ・エンターテイメント　2000 年公開。ジョン・ウォーターズ『セシル・B　ザ・シネマウォーズ』ビデオメーカー 2001 年公開。後者が前者を批判する優位な地平などない。

(8) Minerva ２１世紀ライブラリー７４ 『環境倫理学ノート—比較思想的考察—』小坂国継 ミネルヴァ書房 2003 年 pp.2-3。

(9) アレンカ・ジュパンチッチ『リアルの倫理 カントとラカン』 富樫剛訳 河出書房新社 2003（Ethics of the real : Kant, Lacan by Alenka Zupancic, Copyright Alenka Zupancic 2000 ）p.10（序——なぜカントのために戦うのか？ スラヴォイ・ジジェク pp.7-14)、p.17。

(10) カール・ R ・ポパー『確定性の世界』田島裕訳 信山社 1995, p.55, pp.57-58.（Originally published in English by Thoemmes Antiquarian Books Ltd. under the titel of A World of Propensities, Karl R.Popper 1990)。

(11) ダニエル・ C ・デネット『ダーウィンの危険な思想』山口泰司他訳 青土社 2001, p.666（Darwin's Dangerous Idea by Daniel C.Dennett, 1996, Touchstone )。

(12) 『進化的意思決定』石原英樹・金井雅之著 朝倉書店 2002, p.2。

(13) 立岩真也『自由の平等』岩波書店 2004 p.251-255 を参照。

(14) 『進化的意思決定』（石原・金井 2002）p.101。

(15) 同上 p.112。

(16) 『ロールシャッハ・テストにおける適応的退行と創造性』吉村聡 風間書 2004, p.47-53。

(17) 『囚人のジレンマ』松浦俊輔訳 青土社 1995, p.p.306-328 ( Prisoner's Dilemma by William Poundstone Originally published in U.S.A. by Double-day, Copyright 1992 by William Poundstone )。

(18) デネット 2001, p.337。